

ハリエット・マーティノーの『デメララ』における 奴隷制廃止論、功利主義、文明化の使命

松 本 三枝子

I 喫緊の政治・社会問題

Harriet Martineau は 19 世紀のイギリスにおいて、一貫して奴隷制廃止を訴え続けた女性作家である。彼女の理解者であった William J. Fox が出版していたユニテリアン派の月刊誌に “Black Slavery” (1830) を発表して以来、“Liberia” (1831)、*Demerara* (『デメララ』 1832)、*Society in America* (1837)、*Retrospect of Western Travel* (1838)、*The Hour and the Man* (『時の人』 1841) などにおいて、奴隷制に反対する彼女の姿勢は揺るぎのないものである。

当時のイギリスは、既に 1807 年に奴隷貿易を禁止し、1833 年にはイギリス帝国内での奴隷制を廃止することになる。それゆえ、『デメララ』はイギリス国内で奴隷制に関して激しい議論が交わされていた時代背景の中で執筆されている。1830 年代のホイッグ党にとり、奴隷制廃止は救貧法改正と並び改革を標榜する党にとり重要な課題であった (Hall, “Writing History” 240)。産業革命後のイギリス社会は、それまで経験したことのない様々な社会問題を抱え、正に政治的な解決が望まれていたのである。そのような状況下で、マーティノーが解決の鍵として提示したのが新しい学問であった *political economy* である。彼女は 1832 年から 1834 年にかけて、25 巻のシリーズで *Illustrations of Political Economy* (『経済学例解』) を出版し、積極的にこれらの社会問題解決へと関与していった。このシリーズを出す時には、ノリッジの無名な作家であった彼女は、その最終巻を出した時には作家としての名声を確立し、ロンドンへと住居を移した。それゆえこのシリーズは彼女を経済的に自立できる作家にしたと同時に、少なくともイギリス国民に対

しては、それまで限られた知識人や専門家のものであった経済学という学問を、一般大衆や女性たちなど普通の人々と共有できるものとしたのである。

本論でこれから議論する『デメララ』はそのようなシリーズの一冊として出版されたものである。このシリーズはそのタイトルである『経済学例解』からも、わかるように経済学を解説するシリーズである。既にこのような試みは、マーティノーのみならず Jane Marcet に、女教師と女生徒の問答により経済学の解説をする *Conversations on Political Economy* という前例がある。

しかし、マーセットの問答集と、マーティノーの例解の相違は、後者が物語により解説をしていることである。さらに、このシリーズの各巻末にはまとめとなる解説が付けられていた。もちろんマーティノーが望んだことではないだろうが、その解説は読み飛ばし、物語そのものが楽しんで読まれていた (Courtney 236)。Louis Cazamian は、マーティノーのこれらの物語を、功利主義小説と呼んで、この後に誕生してくる Charles Dickens や Elizabeth Gaskell などの社会小説のレベルには達していない別のものと位置づけている (36-60)。しかし、ディケンズやギャスケルが同時代の社会問題の一部を扱っていたとすれば、マーティノーの長所は、この時代の多様な社会問題を極めて網羅的に扱っていることである (Sanders 195)。

そのような多くの社会問題の中で、最も喫緊の問題のひとつが、『デメララ』で扱われている奴隷制廃止であった。ほぼ10年後に出される『時の人』が、同じ奴隷制廃止を目的として書かれながらも、黒人奴隷／指導者である主人公が、白人同様の潜在能力を持つことを証明するものであるとすれば、『デメララ』の目的は、奴隷制度の持つ非効率性や、非合理性を証明することであった。前者は、実在の人物であるハイチの黒人指導者である Toussaint L'Ouverture を主人公にしたヒストリカル・ロマンであるが、後者は南米ガイアナの北部を流れるデメララ川を想起させる題名となっている。さらに、デメララとはサトウキビからとられる粗糖を意味することからも、現在の南米ガイアナを舞台にしていると理解できる。以上のように『デメララ』に関する時代背景と基本的な状況を把握したうえで、『デメララ』の物語分析に進むことにする。

II イギリスから功利主義を持ち帰った息子

前述したように『時の人』では、ハイチ革命を舞台に、アフラ・ベーンのオルノーコを想起させるトゥサン・ルーヴェルチュールを主人公に、宗主国フランスとの対立の歴史が語られている。同時代のトマス・カーライルなどの指摘もあるように、マーティノーは史実を押さえながらも、イギリス人読者の心情を考慮して、ハイチ革命へのイギリスの関与をほとんど省略している(Callanan 26)¹。つまり、ハイチを舞台に黒人奴隷たちが自由と独立を獲得していく戦いに立ちただかるのは、フランスであり、その象徴としてのナポレオン・ボナパルトである。West Indies をめぐっては、スペイン、フランス、イギリスなどの先進諸国が砂糖のプランテーションの権益をめぐって抗争を繰り広げた時代である。しかし、『時の人』において、フランス革命後のトゥサンが憧憬するのは、ナポレオンであり、彼が裏切られることになるのもナポレオン、フランス軍である。つまり、オルノーコと同様に、トゥサンは無垢な野人であり、フランス軍の奸計により陥れられて獄死するのである。ここにある白人と黒人という二項対立は、フランス人農園主と黒人奴隷であり、フランス軍と黒人解放軍という構造である。つまり、『時の人』のイギリス人読者層は、黒人奴隷の解放と彼らの独立を阻む白人に、自らを投影させることなく、このヒストリカル・ロマンスを読むことができるのである。

それに比較すれば、『デメララ』には、まぎれもなくイギリスとアフリカ、そしてデメララの三角貿易の前提が当然ある。デメララで働く奴隷たちは、アフリカで捕えられ、売買された黒人たちであり、デメララからは、紅茶をたしなむことが定着したイギリスへ大量の砂糖が輸出されていた。一方、産業革命により大量生産されることが可能となった工業製品は、アフリカなどの発展途上国へイギリスから輸出されていた。このような三角貿易により大英帝国は多くの利益を上げ、世界に冠たる国家となっていくのである。この貿易の流れから見れば、砂糖の需要が増加しているイギリスにとり、その値段を下げるのが貿易黒字を増やすためにも必要な課題であったことは容易に理解できる。

人種を決定因とせず、黒人も十分な教育により、白人同様に彼ら自身の国家を建設できると考えたマーティノーが、『時の人』で描きたかったのは、黒

人の潜在能力であった。しかし、『デメララ』において、攻撃され問題視されているのは、サトウキビやコーヒーのプランテーションを所有するイギリス人農園主であり、彼らの経営方法である。ここでは、白人雇用者と黒人奴隷の対立関係に加えて、文明国イギリスと植民地デメララという構造が絡み合っている。

例えば、Mr. Bruce や Mr. Mitchelson などの農園主と、彼らの黒人奴隷である Cassius や Hester、Robert、Suky、Old Mark、Willy、Becky、Nell らの対立構造がある。この不毛ともいえる二項対立を揺るがす存在が、ブルースの息子 Alfred である。彼は子供時代はデメララで育てられるが、イギリスでの教育を受けて妹と共に、14 年振りに帰国する。アルフレッドの目に移ったデメララの変化は、主に二つある。父親を始めとするイギリス人が経営する農園の疲弊と、農園主と奴隷との乖離、疎外化である。ここでは、まずプランテーションの衰退について、経営者の側から分析を加えていくことにする。

アルフレッドの父であるブルース氏が息子に語るデメララの衰退の原因は次のようなものである。

“In England,” he said, “estates go down from generation to generation, and a man may have some pleasure in improving and cultivating, in the hope that his children’s great-grand-children may profit by and carry on his labours. But here, no man knows whether his son will be the better for all he does.” (16-17)

ここでブルース氏が言及しているのは、本国イギリスとデメララの相違である。彼に依れば、イギリスの法律によりデメララは統治されているが、それによりデメララは恩恵も保証もされていない。イギリスとデメララは全く異なるのであり、イギリスの法や思想はここでは機能しないということになる。

このような父親の考え方や慨嘆に対して、息子であるアルフレッドは、有史以来の所有と資産について検証すべきだと考える。アルフレッドの思想は、資産と繁栄に普遍的善の問題が加えられて次のような新たな展開を見せている。

“Capital held by the tenure of mutual agreement, — that is, property in all things created subordinate to man, has a perpetual tendency to increase and improvement; and every such increase is an addition to the good of society. Cultivators of the land have made their portions more and more productive, so as to maintain a greater number of people perpetually.” (21-22)

つまり、資本家、資産の所有者は、法を遵守することにより、繁栄することができ、それにより社会にも恩恵を及ぼし、より多くの人々が幸福になれるという、最大多数の最大幸福というジェレミー・ベンサムの幸福論が展開されている。端的に言えば、アルフレッドは、デメララに功利主義を導入することにより、デメララを改革していこうとしている。

アルフレッドは、父の友人でもある農園主のミッチェルソン氏の過剰なまでの奴隷に対する恐怖心や不信にも気付く。ミッチェルソン氏は片時も妻や娘を残して外出しようとはしない。彼の異常なまでの奴隷に対する警戒心は、彼の使用人である奴隷監督の Horner が奴隷たちに対して行う虐待の裏返しでもある。

物語の中では奴隷たちの憎悪や怒りは、本来彼らを抑圧し搾取しているミッチェルソン氏に対してではなく、彼らを常に監督している眼前のホーナーに向けられていた。台風による洪水で、ホーナーは奴隷たちの目の前で溺死するのだが、ミッチェルソン氏はそれを次のように、ブルース氏に伝えている。

“You have probably heard that my overseer, poor Horner, was lost from the waters being out when he was making his way to the field where his duty called him. We all lament him much; but your son will be glad to hear... that my slaves are conducting themselves as well as if still under the charge of him we have lost. I am persuaded they would have risked their own lives to save his, if it had been possible. But, as they say, it was God’s will that he should perish !” (113)

しかし、ホーナーが溺死するまでの過程はこの手紙の直前に鮮烈に描かれてお

り、奴隷たちが全く助けようとせず傍観していたこと、むしろ彼らがホーナーの死を強く念じ願っていたことを読者は知っている。

つまり、ホーナーの溺死は二つのことを意味している。第一に、彼の死は、農園主であるミッチェルソン氏を代理するものである。本来であったならば、奴隷たちの憎悪や怒りは、ミッチェルソン氏に対するものであり、そのような奴隷たちの感情を認識していたゆえに、彼は過剰なまでの警戒心を奴隷に抱いていたのである。第二に、いかに農園主のミッチェルソン氏が奴隷たちについて理解していないかということである。このような農園主と奴隷の乖離を埋めていくのが、アルフレッドの功利主義的な改革案である。Deborah Loganは、マーティノーが社会問題を解決するために、学問(science)の有効性を信じていたことを指摘している。ローガンに依れば、マーティノーにとり、学問は、人種の亀裂や、国家の亀裂、西洋と東洋を切り離しているものを超越する現代に通用する共通語(lingua franca)であった(“Imperialism,” 13)。

次の節では、ミッチェルソン氏やブルース氏の知らない奴隷の潜在能力について、いかに功利主義的方法により、アルフレッドが引き出していくのかを見ていきたい。

III 黒人奴隷とイギリス人労働者

『デメララ』の冒頭には次のようなマーティノーが付けた序がある。

Instead of encumbering my small pages with references to authorities and acknowledgments of suggestions, I give notice in this place that I am intended to various authors and to some private friends, not only for the information on which the argument of this tale is founded, but for lights respecting negro characters and manners which have enabled me to impart whatever truth may be recognized in my slave personages. (“preface,” v)

この物語を執筆する段階で、マーティノーが植民地の黒人奴隷について多くの著書や新聞・雑誌に掲載された記事・論説を読み、多くの人々から話を聞いて

いることがわかる。しかし、彼女が直接黒人奴隷を見たり、彼らの状況を直接調査してはいないと判断できる。彼女が直接黒人奴隷を見るのは、『経済学例解』を出版後のアメリカ旅行である。その旅行で見聞したアメリカについて、彼女は『アメリカ社会』、『西方旅行回想記』などの旅行記を出版している。そこで彼女が最も衝撃を受けたことが、奴隷たちの無気力であり、動物以下の待遇の中で、人間性を喪失した奴隷たちの状況こそ、マーティノーが訴えたかった問題であった。

『デメララ』においても、奴隷たちの無気力と人間性の喪失は、この物語の主要な課題と呼応するように言及されている。例えば、アルフレッドはミッチェルソン農園で働く奴隷カッシアスが全く異なる二種類の労働をしていることに気付く。第一は、農園での奴隷としての労働であり、そこで彼は労働意欲は全くなく、無気力な黒人奴隷の一人に過ぎない。第二は、彼が自宅近くの土地を耕し、時間を惜しんで働いている、勤勉な農業労働者であることだ。この問題に関する、アルフレッドとカッシアスの対話は、アルフレッドがデメララでの奴隷制の問題を認識することにもなり、彼の功利主義的改革案の中核ともなる理念が構築される契機となる。

カッシアスが農園で労働意欲がないのは、彼が自らの奴隷としての身代金 (ransom) を低く押さえて、自由を早く買い取りたいためである。朝から晩まで奴隷として働いた後に、夜中まで自宅の土地で、野菜などを育て身代金を蓄えている。カッシアスの表裏のある労働に対して、アルフレッドは農園主に対して不誠実であると責めるが、カッシアスの答えは率直である。

“I should be unfaithful if I had ever promised either; but I never did. Why should I be industrious for him? And as for telling the truth, I will do it when it helps me to get my ransom; but if telling the truth hinders my being free, I lie to myself when I tell the truth to my master, for I have said to myself that I will be free.” (36-37)

奴隷であるカッシアスは自由を得るためには勤勉に労働することができ、一方で、自らの価値を上げ身代金を上昇させることになるので、農園では勤勉には

労働しないということがわかる。端的に言えば、奴隷労働とは、このように経済的に非効率な制度なのである。このカッシアスの事例が、彼の特殊な事例ではなく奴隷全体の考え方であるとわかる事件がこの後に起きる。それがミッチェルソン農園で起きた、水車用溜池(mill-dam)の修復工事である。

3ヶ月はかかるというこの修復工事を、アルフレッドは自分に任せてもらえば、大幅に工期を短縮できるとミッチェルソン氏に約束する。これにより、アルフレッドは彼の功利主義的方法が、イギリスのみならずデメララでも通用することを証明しようとする。イギリス本国とデメララとの相違を言い立てる父親のブルース氏ら農園主を説得し、彼の改革案を試行するまたとない機会となるのである。

農園の奴隷としては全く労働意欲がない黒人奴隷たちであるが、日雇い労働で賃金が支払われる(task-work with wages)となると、彼らは活気付き、疲れを知らぬ働きを見せる(70)。当然工期は20日余りにまで短縮され、アルフレッドの改革案は、成功裏に終わると同時に、奴隷たちが人間性を取り戻していく様が描かれていく。労働、収入、人間性は対立するものではなく、むしろ相互に必要なものである。怠惰な奴隷たちの変化に驚くミッチェルソン氏に対して、アルフレッドは次のように説明をしている。

“Labour is the product of mind as much as of body; and, to secure that product, we must sway the mind by the natural means, — by motives. A man must learn to work from self-interest before he will work for the sake of another, and labouring against self-interest is what nobody ought to expect of white men, — much less of slaves.” (70, emphasis added)

ここでアルフレッドの労働論である「労働は肉体同様に精神の産物である」は、人種を超えたものとなっている。つまり、自己利益のない労働には、白人も奴隷も労働意欲を持ってないということである。『デメララ』では、奴隷の無気力労働が再三言及され、描かれている。それは農園の経済的効率を低下させるゆえに、より多くの奴隷を必要とする農園主にとり、利益を減少させ資本を

疲弊させるものである。

このような奴隷の労働と常に比較されているのが、イギリス人労働者であり、彼らは明らかに理想化されている (8, 67, 71, 136)。この同じシリーズ『経済学例解』に収められた『マンチェスター・ストライキ』において、イギリス人労働者の抱える問題と貧困の関係についてマーティノーが詳しく論じているように、同時代のイギリスの労働環境は決して理想化できるような状況ではない。しかし、マーティノーの立場は、人種を超えた労働論を展開することで、奴隷問題をあくまでも功利主義的手法により解決しようとするのである。そもそも、彼女の視点からすれば、奴隷、家畜、自由労働の三者の中で、奴隷労働は最も効率が低いものである (71)。巻末の解説でもこの点は極めて端的に述べられている。

The slave system inflicts an incalculable amount of human suffering, for the sake of making a wholesale waste of labour and capital.

Since the slave system is only supported by legislative protection, the legislature is responsible for the misery caused by direct infliction, and for the injury indirectly occasioned by the waste of labour and capital. (143)

加えて、マーティノーは奴隷の不誠実や虚偽などの愚行や悪行に対しても、彼女独特の考え方を展開している。人種を決定因と考えない彼女は、奴隷たちが置かれた状況こそ彼らの犯罪の原因であると考えており、そのような悲惨な状況に放置している雇用者や白人たちにこそ責任があると次のように述べている。

... our sympathy for slaves ought to increase in proportion to their vices and follies, if it can be proved that those vices and follies arise out of the position in which we place them, or allow them to remain. (*Demerara*, “preface,” v-vi)

それゆえ、自分を虐待し、身代金を上昇させて、自由になることを妨害しよう

とするホーナーへのカッシアスの呪いの祈りや、そのカッシアスの蓄えを盗んでしまう仲間の奴隷ロバート、孤児の幼い奴隷を虐待する女奴隷スーキーなどの犯罪や、道徳的な逸脱は放置されるわけではないものの、厳しく罰せられることはない。むしろ彼らの置かれた劣悪な状況を鑑みた時に、悪行や愚行に対して憐憫と同情を喚起するように描かれている。

特に、カッシアスが身代金を蓄えて、自由を得ようとする計画に、アルフレッドは深い理解を示し、彼の所有者であるミッチェルソン氏との交渉を買って出る。自由を求めて逃亡奴隷となったアルフレッドの幼なじみのウィリーが、猟犬に虐殺される一方で、カッシアスは、自力で蓄えた身代金により自由を勝ち取ることになる。別れの挨拶もせず、リベリアへと向かうカッシアスに対して、不満気なミッチェルソン氏をアルフレッドは批判して次のように思う。

“Lived together!” “These slaveholders never dream that they may not use the language of the employers of a free and reasonable service. An English gentleman may speak to his household servants of the time they have ‘lived together;’ but it is too absurd from the slaveholder who despises his slave to the degraded being who hates his owner.” (136-37, emphasis added)

「一緒に暮らした」などとはとても言えない状況下に、奴隷たちを置いている白人農園主を冷淡に皮肉り、物語は結末を迎える。

それではデメララで自由となった黒人たちが向かう目的地として語られ、黒人たちが白人と同じことができる国として語られるリベリアについて、次節では考察したい。

IV 自由の国リベリアとハイチ革命

リベリアは1822年にアメリカから解放された奴隷たちが入植し、1847年に独立した国である。それゆえ『デメララ』に描かれた時代設定では、黒人たちの入植は進んでいるが、未だ国家としては独立には到っていない状況である。

しかし、カッシアスの言葉からもリベリアが黒人のための黒人による国家へと向かっていったことは明らかであり、アルフレッドのようなイギリス人にもそれが広く認知されていたことがわかる。

デメララが、南米ガイアナを流れるデメララ川周辺であったとすれば、この物語の約10年後に出版される『時の人』の舞台となるハイチは西インド諸島に位置する。冒頭で確認したように、この時代のイギリスにとり、三角貿易の一角を担うこの地域からの砂糖の輸入は大英帝国の繁栄を支えるものであった。しかし、これまで論じてきたように、砂糖のプランテーションでは、イギリスの法律による保護があったにもかかわらず、資本は疲弊しており、閉塞状況に陥っていることがわかる。これに対する処方箋として、さらに独占をすすめるしか方法はないとするブルース氏ら農園主と、アルフレッドの功利主義的な改革案は対照的である(15, 80, 97)²。

法の保護による砂糖生産の独占により、自由な競争が妨げられて、農園経営の合理化や効率化が遅れていることが、『デメララ』では指摘されている。奴隷制度もそのような経済効率の観点からまずは焦点をあてられて議論されている。重要なのは、マーティノーにとり、経済学は単に金銭の問題に留まらず、包括的に社会問題を解決する学問であったことだ。前述したように、奴隷、家畜、自由労働の三者の中で、最も非効率的な労働形態が奴隷であるとするマーティノーにとり、奴隷制はそれだけでも廃止するべきものであった。

加えて、人種を決定因としない環境主義者のマーティノーにとり、黒人の置かれた状況こそが、黒人の犯罪、愚行など諸悪の原因なのであった。彼女は『経済学例解』を出版した後のアメリカ旅行で、奴隷制をつぶさに観察し、彼女の奴隷廃止論には新たな展開が見られる。Susan Belascoは彼女の変化を、次のように分析している。

When she wrote *Demerara* Martineau had been largely concerned with the economic disaster of slavery, which she then viewed as the primary argument for abolition.... But following her observation of slavery in the United States and her involvement with the American abolition movement, Martineau had come to view

slavery as more than an impediment to the greatest economic happiness of the greatest number; in *The Hour and the Man* her concern is the depiction of its costs to human dignity and ability. (Belasco 172)

つまり、同じ奴隷制廃止を扱った物語でありながらも、『デメララ』と『時の人』では、作者であるマーティノーに変化があったという指摘である。ペラスコは、その原因をアメリカ旅行において、実際にマーティノーが奴隷を見たこと、さらにアメリカの奴隷制廃止運動にかかわった経験をあげている。つまり、マーティノーは最大多数の最大幸福論において、多数とはイギリス人や白人に限定されるものではないことを、深く認識したということである。

さらに、この二つの物語における大きな相違点は、解放された奴隷たちのその後の物語であろう。『デメララ』では、詳細は描かれないが、黒人の国リベリアが解放奴隷の目的地として言及されている。『時の人』で、黒人奴隷／指導者であるトゥサン・ルーヴェルチュールが標榜したのは、黒人と白人が共存する国であった。この二作の出版時期は、10年ほど間隔があいていることは既に言及した。さらに、後者はヒストリカル・ロマンであることから、歴史的な事実の枠組みの拘束があることは当然である。

しかし、『デメララ』において、カッシアスが自由を買い取ることができたのは、アルフレッドのミッチェルソン氏への説得と仲介があったからだ。奴隷は自力で自由解放を勝ち取ることは困難で、白人の理解者の協力が必要だとする奴隷解放物語の定石がここにはある³。ハイチ革命もトゥサン・ルーヴェルチュールの死後には、白人を排除することにより、黒人の国家が成立することになるのだが、マーティノーの関心はそこにはない。

イギリス人であった彼女にとり、白人と黒人の共存が重要な課題であった。彼女が『時の人』の中で、トゥサンに言わせた次の言葉は、彼女の人種論の根幹となっているものである。

“By circumstances... the whites have been able to acquire a wide intelligence, a depth of knowledge, from which the blacks have been debarred. I desire for the

blacks a perpetual and friendly intercourse with those who are their superiors in education.” (I, 224)

つまり、現在ある人種間の格差は、教育によるものであり、平等な教育を受けることができれば黒人は白人と同等になる可能性を示唆している。不平等や格差を解消するために、教育を重視する考え方は、マーティノーの特徴でもあるが、その後多くの黒人たちにより支持されたものである⁴。

しかし、にも拘らず、マーティノーの奴隷制廃止論や人種平等論の根底にある白人優位の思考は無視できないものである。それは、1845年に出版される *Dawn Island* になると一層鮮明になる。この未開の熱帯の孤島である曙島にイギリス商船がもたらすものは、貿易と文明である。曙島は島の伝統と原始宗教から、人口は減少し衰退しつつあった。そこにイギリス人船長により、イギリスの製品(マッチ、眼鏡、布など)と現地の産物との物々交換による貿易、さらに文明、つまり道徳や規律が持ち込まれ島は救われ繁栄へと向かう。ここには文明に対する楽観的なまでの肯定的評価があり、貿易と文明が不即不離の関係にある⁵。少なくとも、19世紀のイギリスにおいて、発展途上の国々との貿易は、文明を背景に極めて優位にすすめることを、マーティノーは容認している。大英帝国の「文明化の使命」(civilizing mission)を彼女は肯定しているのである。

マーティノーが描いている黒人奴隷像は、明らかに進化している。『デメララ』のカッシアスは、身代金を蓄えて自らの自由を農園主から買い取る黒人奴隷であるが、彼にはアルフレッドという白人の理解者、仲介者が必要であった。しかし、『時の人』の主人公のトゥサン・ルーヴェルチュールは、ナポレオンと戦った黒人指導者であった。トゥサンの指導力と人格は、『時の人』の中で、ナポレオン以上に高く評価されている。ここに描かれているトゥサンの獄死に対して、イギリス人読者は、深い同情を持つことができる。それは、『デメララ』においてアルフレッドが、奴隷との約束を反古にして、カッシアスの解放を認めようとしないミッチェルソン氏を非難し、カッシアスに同情する姿に重なる。

しかし、このような奴隷解放に理解あるイギリス人たちが、『曙島』に登場するイギリス商船の船長とどのように違うというのだろうか。端的に言えば、大英帝国の拡張政策の中で、マーティノーの奴隷制廃止論はどのように変容していくのだろうか。特に、黒人と白人が相互に共感できると考えた彼女が、インドや中国などのアジア人に対しても同様に考えることができたのか、彼女の人種平等の議論は、大英帝国のアジアへの進展の中でさらに検証を必要とすることになる。

結 び

本論では、マーティノーが功利主義的観点から奴隷制廃止を説いた『デメララ』を中心に分析した。彼女は、奴隷制が黒人を苦しめているのみならず、白人農園主にとっても、非効率的で、非合理的な制度になっていることを、具体的な事件や挿話を導入することで、わかり易く解説している。ここに登場する奴隷の中にはカッシアスのように、自我を持ち将来へのヴィジョンを描くことができる人物が登場する。この物語の 10 年後に出版された『時の人』の主人公であるトゥサンは、さらに発展した人格の持ち主である。しかし、トゥサンの標榜している黒人と白人による人種共存の理想は、結局、大英帝国の進展の中では、どのような結末を迎えることになるのであろうか。つまり、イギリスが文明化の使命を果たすことにより、貿易においてもイギリスの優位を当然視することになるのではないか。そのような危惧を払拭するためには、マーティノーが大英帝国の拡張政策の中で、貿易と文明化の使命をどのように位置づけていたのかを、さらに検証する必要がある。そのような展開を見据えながら、本論では、『デメララ』を中心に奴隷制廃止論と功利主義の関係について明らかにしつつ、マーティノーの教育を重視する考え方が、文明化の使命と結びついた時に、白人優位論へと向かう可能性についても論じた。

注

* 本論は平成 23 年度愛知県立大学学長特別教員研究費による研究成果の一部である。

¹ 奴隷制廃止のために執筆された『時の人』が、ハイチ革命におけるイギリスの関

- 与を削除しているという批判については、他にも Elizabeth Arbuckle(24-25)、Robert Dingley(11)などが論じている。
- 2 ミッチェルソン氏は、アルフレッドをドンキホーテと呼んで、イギリスでの教育について疑問を投げかけている (137)。アルフレッドは、物語結末で、洪水から復興するために、新たな農園経営方法を提案するが、農園主たちの会合において否決される。つまり、デメララでは、アルフレッドの提案する功利主義的な手法は、受け入れられてはいない。
 - 3 Clare Midgley は女性の奴隷制廃止論者が階級問題へと発展しないように、博愛主義的白人の援助により奴隷が解放され、自らを救済者とする傾向を指摘している(90)。『デメララ』では、カシヤスが自由になるのを援助するのは、アルフレッドであるが、黒人自身が自力では自由になれず、博愛主義的白人が救済するという点では共通性がある。
 - 4 例 えば、Frederic Douglass は *Narrative of the Life of Frederick Douglass, an American Slave* で、Henry Louis Gates Jr. も *The Classic Slave Narratives* の序で読書と自由の関係を論じて、教育の重要性を指摘している。
 - 5 タヒチやサンドイッチ諸島では、文明化やキリスト教化の後に、人口が激減していることが指摘されている (Logan, “Imperialism” 103)。文明化はこれらの地域が帝国に組み入れられ、帝国の繁栄を支えることになるのであり、これらの地域が繁栄することには必ずしもなっていない。

References

- Arbuckle, Elisabeth Sanders. “Carlyle Looks Askance at a Hero: Harriet Martineau’s Toussaint L’Ouverture.” *Carlyle Studies Annual*. 19(1991-2000): 23-31.
- Belasco, Susan. “Harriet Martineau’s Black Hero and the American Antislavery Movement.” *Nineteenth-Century Literature*. 55(2000): 157-94.
- Callanan, Laura. *Deciphering Race*. Columbus: Ohio State UP, 2006.
- Cazamian, Louis. *The Social Novel in England 1830-1850*. Trans. Martin Fido. London: Routledge, 1973.
- Courtney, Janet E. *Freethinkers of the XIXth Century*. London: Chapman and Hall, 1920.
- Dzelzainis, Ella and Cora Kaplan (eds). *Harriet Martineau: Authorship, Society and Empire*. Manchester : Manchester UP, 2010.
- Dingley, Robert. “Monuments, Maidens and Black Jacobins: Narrative Displacement in Harriet Martineau’s *The Hour and the Man*.” *Nineteenth-Century Feminism*. 6 (2002): 8-18.
- Douglass, Frederic. *Narrative of the Life of Frederick Douglass, an American Slave*. New York:

- Anchor Books, 1973.
- Gates, Henry Louis Jr. (ed). *The Classic Slave Narratives*. New York: Penguin, 1987.
- Goodlad, Lauren M. E. "Imperial woman: Harriet Martineau, geopolitics and the romance of improvement." *Harriet Martineau: Authorship, Society and Empire*. Eds. Ella Dzelzainis and Cora Kaplan. Manchester : Manchester UP, 2010.
- Hall, Catherine ed. *Cultures of Empire: A Reader*. Manchester : Manchester UP, 2010.
- . "Writing History, writing a nation: Harriet Martineau's History of peace." *Harriet Martineau: Authorship, Society and Empire*. Eds. Ella Dzelzainis and Cora Kaplan. Manchester : Manchester UP, 2010.
- ジェームズ, C. L. R. 『ブラック ジャコバン : トゥサン＝ルーヴェルチュールとハイチ革命』青木芳夫監訳、大村書店、1991.
- Kaplan, Cora. "Black Heroes/White Writers: Toussaint L'Ouverture and the Literary Imagination." *History Workshop Journal*. 46(1998): 37-56.
- . "Slavery, race, history: Harriet Martineau's ethnographic imagination." *Harriet Martineau: Authorship, Society and Empire*. Eds. Ella Dzelzainis and Cora Kaplan. Manchester : Manchester UP, 2010.
- Logan, Deborah A. *Harriet Martineau's Writing on the British Empire*. London: Pickering & Chatto, 2004. 5 vols.
- . *Harriet Martineau, Victorian Imperialism, and the Civilizing Mission*. Farnham: Ashgate, 2010.
- Martineau, Harriet. *Demerara. Illustrations of Political Economy*. London: Charles Fox, Paternoster-Row, 1834.
- . *The Hour and the Man*. 1841. New York: AMS Press, 1974.
- Midgley, Clare. *Women against Slavery: The British Campaigns, 1780-1870*. London: Routledge, 1992.
- Sanders, Valerie. *Reason over Passion*. London: Harvester, 1986.
- Weiner, Gaby (ed). *Harriet Martineau's Autobiography*. London: Virago, 1983.
- Yates, Gayle Graham. *Harriet Martineau on Women*. Piscataway: Rutgers UP, 1985.